

保育実習において、学生が学ぶために、 保育者はどのような働きかけをしているのか

—実習生の変容を通して—

In Teaching Practice at nurserys, for students to learn, through the caregiver transformation of the one
—Through transformation for students—

重枝 彩
Aya Shigeeda

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 人間生活科学専攻 修士課程

キーワード : 保育, 保育実習, 保育者養成

Key words : Childcare, Teaching Practice at nurserys , Childcare teacher training

1. 研究目的

子ども・子育て支援新制度は、平成 24 年 8 月に成立し、平成 27 年 4 月からは本格施行された。「新制度の目的は、“質の高い幼児期の教育・保育を総合的に提供”すること」(内閣府ホームページ)とされている。質の高い教育・保育を実施する上では、保育者自身の質の向上を欠かすことは出来ないだろう。

一方で、現在、保育士の不足が叫ばれている。厚生労働省(2013)は「平成 29 年度末には保育士が約 7.4 万人不足することが見込まれており、保育を支える保育士の確保が重要」としている。例えば、政府では、保育士不足を補うため「准保育士」等の資格を設けることが議題に上がった。しかし、このような制度の元で保育士の質を保つ、また向上させることが出来るのか、疑問が残る。このように保育士の資格においても、社会的に問題視されていると言えるだろう。

従って、新制度化で言われているような教育・保育の質の向上の為に、保育者の養成において保育を学ぶ学生の質の保証、その学生の指導の保証が問われるだろう。

ところで、保育者養成教育において重要な科目として実習および実習指導が挙げられる。森(2003)は「保育者養成教育において実習は授業と保育現場との接点となる数少ない科目の一つであり、教育的意義はきわめて大きい。実習教育の充実がこれからの保育者の資質向上につながるといっても

過言ではないだろう」と述べている。保育学生は実習の場で、机上の学びで得ている知識を更に深めると同時に、机上の学びでは得ることの出来ない、主体性や感受性、思考力の大切さに気づき、その力を伸ばすことの重要性に気づくことが出来る。従って、保育者養成教育の中でも実習・実習指導は重要であることは明らかである。

現在、我が国において、保育士資格を有するのは、児童福祉法において、都道府県知事の指定する保育士を養成する学校その他の施設を卒業した者、または、保育士試験に合格した者であるとされている。そして、保育者養成校においては、定められた単位の履修を行えば卒業生には保育士資格が与えられる。

では、保育者養成校において、実習・実習指導のプログラムはどのように構築されているのだろうか。森(2003)は「保育者養成校において実習教育を考える時、学生が実習を受身的ではなく主体的に捉えていくことができるような教育プログラムを構築する必要があるのである」と述べている。このように、実習や実習指導のプログラムの構築が一任されている保育者養成校では、実習や実習指導をどのように捉え、どのように学生へ指導していくのか、またその実習形態はどのような形を取るのかは重要な課題であると言えよう。

そこで、本研究では、保育実習に着目し、学生の学び手としての変化のプロセスにおける保育者の働きかけの分析を通し、保育者養成の過程にお

いて、学生が学ぶために、保育者はどのような働きかけをしているのか、を明らかにすることを目的とする。

2. 研究実施内容

本年に関しては、研究テーマの設定、先行研究の収集、自身の研究テーマに近い先行研究の整理、分析を行った。

筆者の研究に近い先行研究を見出すため、筆者の研究のキーワードとして考えられる、保育、実習、保育実習、幼稚園、学生、指導、働きかけ、変容、初任保育士、というキーワードを、組み合わせて論文検索サイト CiNii で「保育実習／学生／指導」「保育／実習／働きかけ」「幼稚園／実習／学生／変容」「幼稚園／実習／学生／指導」で検索をかけた。上記のキーワードを用いて検索した結果、論文検索サイト CiNii で閲覧できたものは、83 件であった。

その内実は、実習による学生への影響に着目しているもの（古田、康生・渡部、昌史（2015）「幼稚園実習及び保育実習Ⅱによる保育学生の子どもイメージの変容」など）、養成校で行われている実習事前指導、又は実習事後指導の効果や指導法に着目しているもの（長谷、秀揮（2015）「保育実習Ⅰにおける評価についての一考察」など）研究を行っている筆者の実習指導の授業実践の整理を行った上で、今後の指導法を探っているもの、（塚野、弘明（2013）「教員養成における保育カンファレンスについての研究：幼稚園教育実習生の実践」など）実習の評価に着目しているもの、（中西、利恵・大森、雅人・曲田、映世・ほか（2012）の「実習指導の効果を高める教育方法の研究(その3)幼稚園・保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から」など）であった。他、保育者養成過程の学生の進路選択に着目しているもの、学生が実習で行う責任実習に着目しているものなどが見受けられた。

これらは、養成校で行われている実習指導に関する研究、または、実習に行く前の学生、実習の後の学生に着目している研究、中には、実習の内情を研究しようとするものもあるが、実習後に学生に質問紙調査を行うにとどまっている。

筆者が行おうとしている研究は、実習中に具体的に保育者から具体的にどのような働きかけがされているか、更には、それに基づき学生がどのように変容したのかに関する研究である。保育実

習のまさに実習中の保育者から学生への働きかけに着目した研究が一つだけ見い出せた。しかし、この先行研究は、記されている内容が不十分などところが多かった。その為、不十分なところを、補いつつ分析を行った。以下、記す。

1. 1. 幼稚園実習における日誌や園での事前指導のどのコメントが実習生の学びに有効であるのかを明らかにしようとした研究

研究タイトル：保育者の働きかけによって生じた教育実習生の変容

筆者：庄籠道子 池田 行伸

1. 研究目的

日誌に書く担任や庄籠の所感や事前指導における講義のどのコメントや言葉が、実習生の学びに有効であったのかを明らかにすること。

2. 研究方法

2. 1. 研究対象

2. 1. 1. 実習生の変容の検証に必要な対象

佐賀大学文化教育学部付属幼稚園に、平成 18 年度から平成 20 年度の間の実習に来た実習生、計 14 名の実習日誌の記載、実習後の園に提出するレポートの記載。

実習日誌の記載の中でも、実習生の記載は、「保育者の援助」欄、「考察及び反省」欄、「教育実習を終えて（感想と反省）」欄、「事前指導」欄、から抜き出されている。

また、筆者が関わった際の実習生の様子。

2. 1. 2. コメントや言葉を特定するのに必要な対象

実習生が入ったクラスの担任保育者からの記載、副園長である庄籠の記載。担任の記載は、「保育者の援助」欄、「指導者所感」欄、から、庄籠の記載は、「園長・副園長所感」欄から抜き出されている。また、庄籠が実習生に話したエピソード。

2. 2. 研究方法

論文の中に方法に関する記載はない。論文は、筆者が「変化を思わせる」とする 6 つの視点からエピソードを取り上げ、上記の対象を記載している。記載は、いくつかの実習生の記載を時系列に並べているもの、実習生の実習を終えてからの記述のみを記載しているものがある。

ただし、目的である「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」を明らかにする為には、実習生の変容のあり方、すなわち、①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）があり、③指導後の実習生の姿や認識、という3つの局面を時系列に並べ、それが変容するという点において、学びへの有効性を論ずることが、前提と考えられる。

そこで、そうした枠組みに基づいて、論文に示されたそれぞれのエピソードを、整理すると、以下のような図にすることが出来る。

3. 6つのエピソードの分類

筆者が「変化を思わせる」とする6つの視点から取り上げたエピソードにおける学生と保育者との日誌におけるやり取りを①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）、③指導後の実習生の姿や認識、という3つの局面を時系列に並べると以下のような図になる。

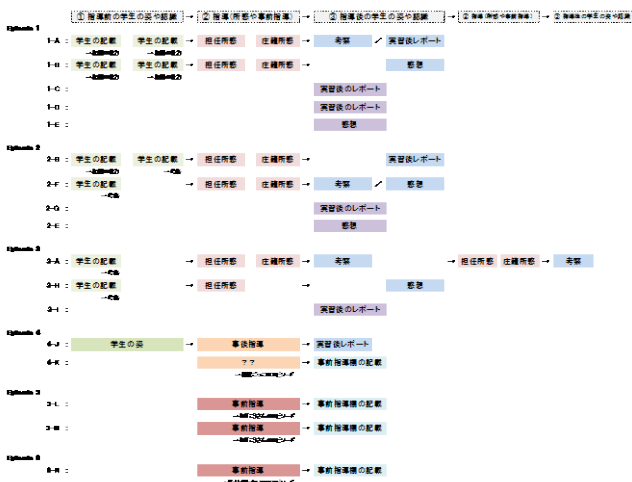


図1. 6つのエピソードの分類

この図から、6つの視点から取り上げたエピソードにおける学生と保育者との日誌におけるやり取りは、17つである。

その17つのやり取りの記載は、いくつかの実習生の姿や記載とそれに関する保育者の指導を時系列に並べているものが1-A, 1-B, 2-B, 2-F, 3-A, 3-H, 4-J, 計7つ、実習生の実習を終えてからの記述のみを記載しているものが1-C, 1-D, 1-E, 2-G, 2-E, 3-I, 計6つ、事前指導とその事前指導に対する学生の記載を並べているものが4-K, 5-L,

5-M, 6-N, 計4つである。

上記でも述べた通り、目的である「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」を明らかにする為には、実習生の変容のあり方、すなわち、①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）があり、③指導後の実習生の姿や認識、という3つの局面を時系列に並べ、それが変容するという点において、学びへの有効性を論ずることが、必要である。その為、この枠組みに当てはまるやり取りは、17つのやり取りのうち、いくつかの実習生の姿や記載とそれに関する保育者の指導を時系列に並べているもの、7つである。

他の10つのやり取りは、学生が実習後に記載している日誌やレポートから、学生の想起での①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）、③指導後の実習生の姿や認識、を捉えることが出来ない訳ではない。

しかし、学生が保育者の指導を受け、更に自身の認識が変容した上で、指導を受ける前の自身の姿や認識を記載していることを考えると、時系列に学生の記載や保育者の指導を並べているものと、比較することは資料の性質が異なる為、出来ないだろう。

また、学生の想起で、①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）、③指導後の実習生の姿や認識を捉えることが出来るといっても、②指導に関しては、学生の記載から、保育者の所感に「〇〇」というものがあつた、というような記載のされ方をしているものがない。このことから、学生の想起で①、②、③を追うことは、庄籠の研究目的である「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」を明らかにすることは出来ないと考える。

つまり、検討するべきやり取りは、17つのやり取りのうち、いくつかの実習生の姿や記載とそれに関する保育者の指導を時系列に並べているもの、7つである。これらについて、以下、検討する。

4. 7つのやり取りの検討

筆者が「変化を思わせる」とする6つの視点から取り上げたエピソードにおける学生と保育者との日誌におけるやり取りを①指導前の実習生の姿や認識、それに対する②指導（所感や事前指導）、③指導後の実習生の姿や認識、という3つの局面を時系列に並べたものうち、いくつかの実習生

の姿や記載とそれに関する保育者の指導を時系列に並べているもの、7つのやり取り、1-A, 1-B, 2-B, 2-F, 3-A, 3-H, 4-J を図に表すと以下のような図になる。

4. 1. 1-A の場合

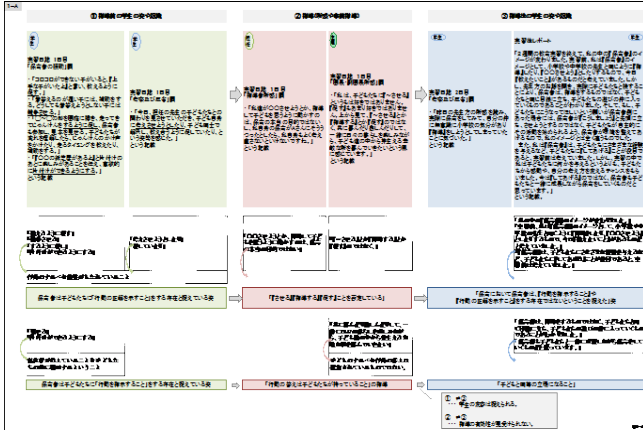


図 2. 1-A

4. 2. 1-B の場合

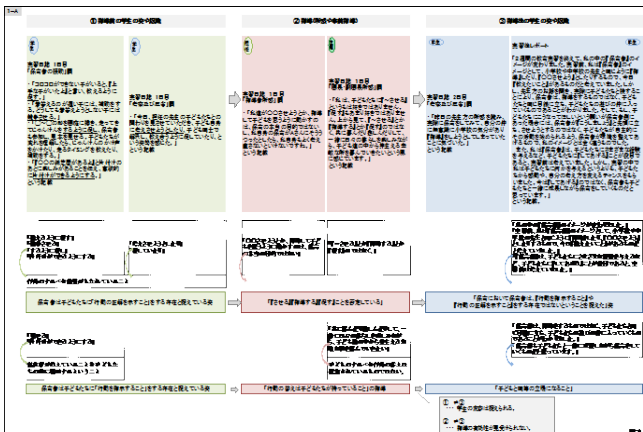


図 3. 1-B

4. 3. 2-B の場合

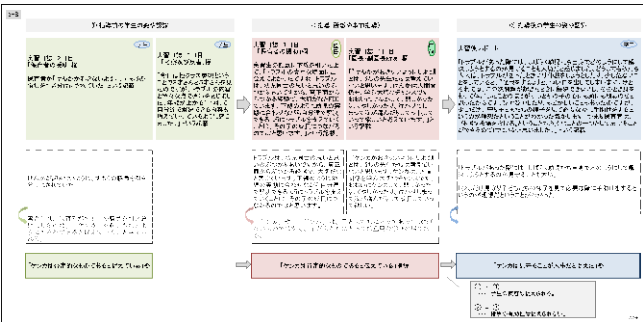


図 4. 2-B

4. 4. 2-F の場合

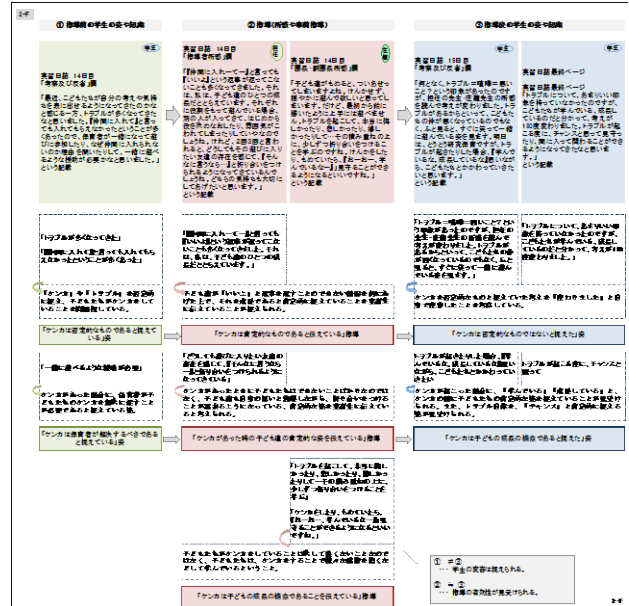


図 5. 2-F

4. 5. 3-A の場合

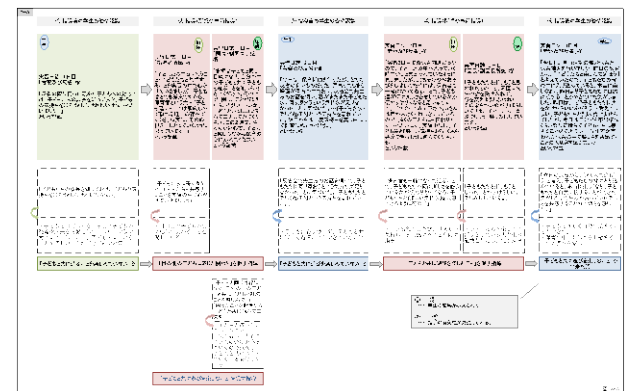


図 6. 3-A

4. 6. 3-H の場合

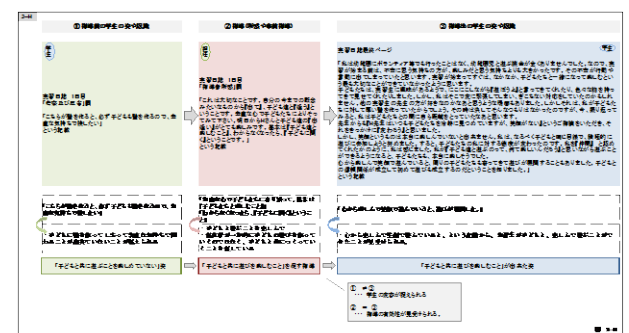


図 7. 3-H

4. 7. 4-J の場合

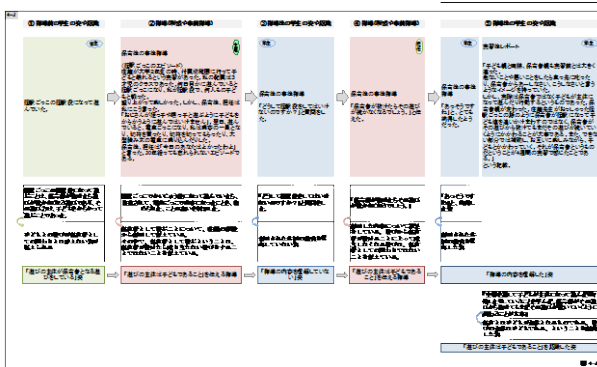


図 8. 4-J

この図から、7つのやり取りのうち学生の変容が捉えられるもの、つまり、①指導前の実習生の姿や認識、と③指導後の実習生の姿や認識が異なっているものは全てであるといえる。

ただ、指導の有効性が捉えられるもの、つまり、②指導（所感や事前指導）と③指導後の実習生の姿や認識が一致しているものは、2-F, 3-A, 3-H, 4-J である。

5. 結果

上記に示した通り、その 17 つのやり取りの記載のうち 2-F, 3-A, 3-H, 4-J において、学生の変容が捉えられ、更に、指導の有効性が推測できる。以上のことから、庄籠の研究目的である「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」について、結果としては、2-F, 3-A, 3-H, 4-J において、実習生の指導をしている担任、庄籠からの所感が有効であった、ということが言えるだろう。

1. 3. 庄籠の研究から考える

以上、庄籠の研究を見てきた。庄籠の研究の目的である、実習における「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」明らかにすることは、実習における保育現場での保育者からの指導について考える際、重要なことであると言えるだろう。しかし、庄籠の研究をここまで見ると、いくつかの問題点があげられる。

第一に、庄籠が行っているであろう、分析の方法が論文から、把握することが出来ないことである。どのような視点から、どのような分析方法を用いて資料を分析しているのかが分からないため、

学生が変容していること、更に、研究の目的である、「所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのか」は、明らかになっていない。また、考察についても、全体の見受けられるが、一つひとつのやり取りについての考察が見い出せないことから、研究の目的が明らかになっているとは言えないだろう。

第二に、資料が、事例によって異なる点である。並べられた資料は、上記に示した通り、いくつかの実習生の姿や記載とそれに関する保育者の指導を時系列に並べているものが 7 つ、実習生の実習を終えてからの記述のみを記載しているものが 6 つ、事前指導とその事前指導に対する学生の記載を並べているものが 4 つであった。このことから、17 のやり取りが並べられているものの、実際に、学生の変容を追うことが出来る資料として取り扱えるものは、7 つとなっている。記載する資料は、同じ枠組み当てはめることが出来るもののみを使用する必要があると言えるだろう。

3. まとめと今後の課題

実習中に具体的に保育者から具体的にどのような働きかけがされているか、更には、それに基づき学生がどのように変容したのかについての研究の先行研究となるものを探ってきた。

第一に、保育者養成校で行われている事前、事後指導に着目し、保育者養成校の教師から学生への指導に関する研究は、数多く見受けられた。しかし、保育実習や、幼稚園実習の現場でのまさに実習期間中の保育者から学生への指導、働きかけに関する研究は少ない。

第二に、その少ない中で見い出された、庄籠道子・池田行伸 (2009) においては、上記に示した通り、分析方法が論文から把握することが出来ないこと、考察が不十分であること、資料が適切な形とは言えないことが問題点としてあげられる。

以上のことから、筆者は、実習生の変容過程に着目し、「保育実習指導における保育者の『働きかけ』に関する研究」を行うことで、保育者養成の過程において、学生が学ぶために、保育者はどのような働きかけをしているのか、を明らかにする。

今後の課題としては、先行研究の整理が不十分な部分があるため、そこを早急に整理し、終わらせることが第一である。更には、6月に実施する予定であるフィールド調査に向けて、研究方法、

分析方法などを決定していくことを早急に進めなくてはならない。

4. この助成による発表論文等
なし。